

ザレゴトミステリー～ 戯言遣いと人間失格

全智一皆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東京武偵高校の強襲科には、二人の異質な武偵コンビが居る。

一人は、Sランクの武偵でありながら教務科から危険因子としてマークされている『殺人鬼』。

一人は、Eランクでありながら『殺人鬼』に釣り合い、教務科から危険指定されている『欠陥品』。

《人間失格》零崎人識と《欠陥製品》戯言遣い。東京武偵高の異質なコンビが、介入する物語。

目次

第一章 「武偵（安定）」

第1話

1

第一章 「武偵（安定）」

第1話

0

安楽椅子探偵？

ああ、探偵としての職務を碌に全うしない探偵の事だろ？

1

びび、びび、と、アニメやら漫画でよく登場するあるあるな形をした目覚まし時計から、喧しく、眠りが浅くもなく深くもない中立的なぼくの眠りを妨げる音が鳴っている。ぎんぎんと耳に響く目覚ましに、ぼくは隠すことなくうんざりとし、顔を顰めたままベッドから体を起こし、

「起きます」

と、いつもの決まり文句（という戯言を）言つて、時計を止めたのだった。

布団を退かし、ベッドから降りて、ぼくは若干ふらふらとした足取りで台所へと向かい、

「よお、予想より早いお目覚めだな、《欠陥製品》。」

「やあ、予想通り早いお目覚めだね、《人間失格》。」

寮の同室者、老人の白髪とは別の色をした斑模様（にんげんしっかく）の白髪、ガチャガチャのストラップと携帯電話のストラップをピアスにした殺人鬼——ぼくの対極、零崎人識に、挨拶らしくない挨拶の言葉を投げた。

零崎はフライパンに載せていたベーコンエッグを皿に載せながら「朝っぱらからその調子なら問題なさそうだな。今日も死の垣根を乗り越えて行こうぜ、お鏡さん。」と、いつもの如く笑って、強襲科らしく言い返してきた。

皆様が察しの通り、零崎はこの寮における料理担当だ。

予想外というか何というか、零崎は意外にも料理が出来る奴だった。ぼくとはえらい違いだ。

あの京都連続通り魔殺人事件の犯人である殺人鬼が、こうも家庭的なものだと、誰が思うだろうか。

「ベーコンエッグか。見るのはハウル以来だ。」

「お前みたいな奴もジブリ見るのかよ。」

「ぼくみたいな奴でもジブリは見るさ。君みたいな殺人鬼がジブリを見るようにね。」

「かはは、かかしのカブみてえな奴が言ってる。」

「ぼくがカブなら、君は殺人鬼らしくカルシファーか？」

「そこでマルクルって言わない辺りセンスがあるぜ、欠陥。ま、お前の心臓なんざ死んでもごめんだがな。」

「ぼくとしても、君みたいな殺人鬼の悪魔に心臓を渡すくらいなら星に撃たれた方がマシだ。」

「それだとハウルだろーが。」

「そっくりだろ？」

「どこがだよ！ 性格から根の部分まで完全に違いだらうが！」

「ぼくは見栄っ張りな弱虫さ。音々にもそう言われた。」

「見栄っ張りな弱虫は殺人鬼相手に戦いを挑んだりはしねーよ、戯言遣い。」

「傑作だっただろー？」

「ああ、戯言だった。」

そんな、くだらない戯言話に花を咲かせて、ぼくと零崎は食事を取る。

両手を合わせて、「いただきます」と、眼の前の食材に感謝（消しゴムを拾ってくれた際に言う感謝の言葉並みの感謝）を込めて、ぼくと零崎はベーコンエッグを箸で半分にして、それを箸で掴んで頬張った。

端的に言えば、普通に美味しかった。というか、それ以外に特徴が無い。

あるとすれば、実家で食べるご飯のようだ。

「そっぴや欠陥」

「なんだい失格」

「今年はロンドンから武偵が来たらしいぜ？」

やや楽しげに、零崎は言ってきた。

そっぴえば、ぼくは武偵について語つただろうか。

「いや、語つていない。忘れていた。どうやら、〃こつち〃でも記憶力の無さは相変わらずらしい。

まあ、思ひ出せたのなら良し。早速、語つていくとしよう。

武偵とは、武器による武力行使を許可されている探偵の事であり、そしてぼくと零崎が通つてゐるのは、日本における武偵を育てる高校の一つ「東京武偵高校」である。

簡単に言つてしまえば、箱庭学園のミステリー小説バージョンと言つた所だろうか。

ぼくと零崎が通う東京武偵高は最大で15もの学科があり、ぼくと零崎が所属してゐるのは武偵高における死線、強襲科だ。

15の学科の一つ、強襲科。アサルト。拳銃、刀剣、その他の武器を用いた強襲逮捕を得意とする危険極まる場所だ。毎年役3%の生徒が死亡するのだという。

二つ、狙撃科。スナイプ。主に狙撃銃を使用しま遠隔からの戦闘支援を主に学ぶ学科

だ。

三つ、諜報科。レザド。犯罪組織に対する諜報、工作、破壊活動を主に学ぶ学科で、ぼくの恋人——玖渚友が居るのも、その諜報科だ。

四つ、尋問科。ダギユラ。逮捕した犯罪者、もしくは容疑者への尋問を学ぶ学科で、過去にぼくが狂わせかけた先生が担当する学科でもある。

五つ、探偵科。インケスタ。探偵術と推理術による調査、分析を主に学ぶ、一番探偵らしい学科。ぼくと零崎の同学科だった友人が今年から入った学科でもある。

六つ、鑑識科。レピア。犯罪現場や証拠品の科学的検査を主に学ぶ学科。

七つ、装備科。アムド。装備品の調達、カスタマイズやメンテナンスを主に学ぶ学科。ぼくの愛銃であるジェリコ914のカスタマイズやメンテナンスをしてくれる小柄な天才ちゃんが所属してる場所でもある。

八つ、車輛科。ロジ。車輛、船舶、航空機の運転、操縦を主に学ぶ学科。この学科だと、15歳から普通自動車の免許が取れるらしい。

九つ、通信科。コネクト。通信機器を用いた情報連絡によるバックアップを主に学ぶ学科。友が諜報科と一緒に所属してる学科でもある。

十つ、情報科。インフォルマ。情報処理機器を用いた情報収集と整理を主に学ぶ学科。これまた友が諜報科、通信科と一緒に所属してる学科。

一一、衛生科。メデイカ。武偵活動の現場に於ける医療、救助活動を主に学ぶ学科。
一二、救護科。アンビュランス。武偵病院に勤務する医師の育成、医療活動の実践を主に学ぶ学科。

一三、超能力捜査研究科。SSR、通称S研。魔術などの超常の能力を研究、育成する学科。初めて聞いた時は驚いた。まさか超能力や魔術なんてものが実在していたとは。

一四、特殊捜査研究科。CVR。特殊条件下に於ける犯罪捜査を学ぶ学科。確か美少女しか居なかった気がする。

一四、教務科。マスターズ。武偵高の教職員が就いている学科で、武偵高において最も恐れられる場所の一つだ。

一五、一般教科。ノルマーレ。通常の高校と同じような一般教科を学ぶ学科。普通の学科だ。

長々しくなってしまったけれど、今年は強襲科に期待のエリートがやって来たという話しを、零崎はぼくに振ってきたという事だ。

「えっと、確か…ホームズ・アリアさんだったっけ？」

「惜しいな。正確には神崎・H・アリアだ。ロンドン武偵高において強襲科Sランクの武偵で、この東京武偵高でもSランクだ。」

「へえ。それは凄いな。良かったじゃないか零崎、遠山くんとは別のライバルが出て。」

「そうだなあ。遠山の野郎が探偵科に行っちまったからな。暫くは神崎で暇潰しさせてもらおうとするぜ。」

「〃暇潰し〃程度で良いのか？」

「おいおい、俺を誰だと思ってるんだ？ 暴力の世界で最も忌み嫌われた殺し名、零崎一賊の忌み子ならぬ鬼子、世界的有名な犯罪者組織『イ・ウー』すら近付く事を拒絶した《究極》と《絶対》の間に産まれた血統書付きの殺人鬼、零崎人識さまだぜ？ たかが未来予知が出来て、かつあらゆる武術を持っただけの探偵の子孫を相手にするなんざ、大したもんでもねーよ。」

「随分と自信有りげだな。慢心は命取りって言葉を知らないのかい？」

「知ってる知ってる。自分の能力に慢心した呪い名の奴らの命を何度も取ってきたからな。」

「それは大したものだ。褒めて遣わす」

「何様だよてめえ。ぶん殴るぞ。」

「君がぼくをぶん殴るのと同時に、ぼくは君の脛を思いつき蹴る。」

「かはは、5月13日の時みてえにか？」

「ぼくと君が出会った日のようにさ」
零崎は笑って。

ぼくは、笑わなかった。